



糸賀一雄の福祉思想－「教育愛」と「共感の世界」をめぐって－

蜂谷, 俊隆

(Citation)

生誕百年+α「糸賀一雄」再考(3)～「教育愛」をめぐって～:1-10

(Issue Date)

2017-03-19

(Resource Type)

conference object

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90003904>



私の問題意識と糸賀の思想

1) 福祉関係者と教養の問題

阿部謹也『「教養」とは何か』(1997,講談社)

- ・(教養があるとは)「自分が社会の中でどのような位置にあり、社会のためになにができるかを知っている状態、あるいはそれを知らうと努力している状況」をいう。(56頁)
- ・「我が国には二種類の人間がいるとあってよいだろう。建前としての正義や公正の原理を主張する人とそのような主張をする前に正義や公正がどのような条件の下で実現できるかを考えた上でなければ発言しない人である。」一般的にはこの二種類の人間を自分の中にもっていて、常に使い分けながら生きているが、ある場合においては「この二種類の人間がはっきり乖離している場合」がある。(10-11頁)

糸賀一雄『福祉の思想』(1968,日本放送出版協会)

- ・「資本主義社会の構造的欠陥が生み出す問題」に対して、傍観者的に社会福祉事業の是非を問うのではなく、その欠陥を補うために「施設を砦として、この子らとともにどうしたらよいかという具体的な方法を考えさせるもの」である。同時に、施設は「理解と愛情にむすばれた新しい社会形成のための砦としての役割をもっていること」を自覚し、それに基づいて役割を果たしていくべきである。(14頁)
- ・「福祉的活動そのもののなかにおいて、自己自身と実存的に対決」し、自らの内にある利己心を克服することが不可避である。(11頁)

糸賀一雄(編:國本真吾)『ミットレーベン—故郷・鳥取での最期の講義』(2014,第十四回全国障がい者芸術・文化祭とっとり大会実行委員会)

- ・「自分から進んでそういう(筆者注:利己的な)自由を捨てることの出来る自由というものが人格的な深い根を持った自由として尊重されることがあるんですね。(略)静かに己を抑えて、本当に本当の自由というものを、我々のものにしていくためのプロセスを、私は尊重したいと思いますね。そういうものが国民に訴えるでしょ。我々はですね、憤激して火花を散らしている者を見て、ビックリは致しませんが感動は致しません。(略)腹の底から揺さぶりをかけていけるものでなければいけない。」(12～20頁)

2) 社会事業史(研究)における糸賀の位置

吉田久一『(社会福祉と諸科学一)社会事業理論の歴史』(1974,一粒社)

- ・「戦前児童福祉にみられた社会防衛的、経済保障の理念に対し、『療育理念』を提示し、ともに生きる者としての愛と共感の世界を実践した」、「『社会の中で育てる社会的人格』は、やがて後年展開されるノーマリゼーションの先取りであり、また施設の社会化もそうであった。」(384頁)
- ・ただし、戦前の社会事業をくぐっていない楽観的な面がある。

吉田久一・松島正儀・阿部志郎「(鼎談)養護実践の原点を探る—先覚者の実践から学ぶもの」『養護施設の四〇年—原点と方向をさぐる』(1980,全国社会福祉協議会養護施設協議会)

- ・「(略)戦後四〇年は、糸賀一雄氏がなんとなく社会福祉関係者を代表しているようにみえるでしょう。(略)戦前・戦中から社会事業に出ている者からみれば、非常にハッピーですよ。戦後に出てきたから。戦争中の社会事業の苦勞とか、その前の戦争に入る過程とか、そういう屈折したものがない。」(20頁)

I. 木村素衛の教養思想とファシズム批判

▼木村の生い立ちと哲学との出会い

1895（明治 28）年、石川県生まれ。／（幼少年期）父の事業が失敗、別居／京都第一中学校在学中に発病、2年遅れて第三高等学校に入学、病気の再発のため退学／別居していた父との死別。

木村素衛「研究の回顧」『学生と科学』（1939,日本評論社）

・「私は病床でひとり生死の問題に直面していた。それは私にとって回避を許さない現実当面の問題であった。」

・「中学を出て直ぐ懐疑に突き当たった私は、自分の問題を究明するに当って、信頼できる学問は教はった数学と自然科学とのほかにないと思はれた」が、「どうしても考えが唯物論的運命論的になつて行つた。併しその立場では意志の自由の問題で動きがとれなく」なつてしまい、「認識論の問題」が関心の中心となつていった。

▼西田幾多郎の『善の研究』との出会い／西田との面会、聴講／哲学への失望

木村素衛『魂の静かなる時に』（1955, 弘文堂）

・（1918（大正 7）年 11 月 7 日）「講義には単なる知的興味しか感ぜなくなつてきた。（略）哲学から宗教へ私の求める方向が転向しつゝある事を知つた。知の満足などはどうでもよい。全人格の安心を得なければならぬ。（略）「如何に反抗しても運命に支配」され、「薄氷の上の生活」を生きざるを得ない「生」の苦悩に対し、哲学は直ちには安心感を与えなかつた。

・「懺悔は、真に運命の深さと、自己の無力と、生きることの悩みとをしみじみ知つた霊の必然的な行ひである。（略）縷々善意が破られて悲しい運命に陥ることの多い人生、切るに切られない執着の為に悩む煩悩から、吾々がとても自由になれないのを知つたとき、たゞひたすらに神に祈禱する依り他ない。」

大学での講義は論理は面白いが「空虚な面白さ」／「幻滅の悲哀に沈んだ時、そこに却つて真の生活があつた。『生』の国への扉はその『悲しみ』に在つた。」

・（12 月 2 日）「懺悔は創造である。懺悔に於て人は初めて明確に罪の姿を凝視し得る。否彼れ自身の姿を明に見得る。（略）悩める者は自己を芸術品に産み出でゝ漸く憩いを得る。芸術は懺悔でなければならぬ。」

・（翌年 1 月 27 日）「韓非子位つまらぬ人間はゐない。彼は小人の徳、奴隷の徳を説く。ここでは生活からあらゆる内面的、自主的なものが否定され、たゞ対者の鼻息をうかがふの外、生活と云ふものがない。」

▼「表現愛」と「表現的自覚」

1920 年、京都帝国大学文学部哲学科入学（選科）／大谷大学、広島文理大学等の教員／1933 年、京都帝国大学文学部教育学教授法講座着任

木村素衛『表現愛』（1939,岩波書店）

・人間の具体的本質は「自覚的表現性」である：自分の「外」に働きかけて、形の無いものを含む広い意味での「凡そ何ものかを作り現すことに於てみづからの存在を具体的に維持して行くやうな生命のはたらき」

※「外」とは、主体に対する抵抗者、障礙を与えるものであり、実現すべき形がそこに現れてはいない

ことを意味する。同時に、主体がそのような抵抗を排除し、障碍を克服して作り出すものであり、さらに主体に呼びかけ、語りかける意志である。

・主体は自らの内に、理想を見ることになり、現に主体が直面している環境において、本来あるべき理想を見るのであり、その意味において主体は歴史的な自覚点である。ここに主体は自由をもつことになる。なぜなら、歴史的な自覚点に立つことは、同時に理想を否定する自由も持つことになり、さらにこれを否定することによってのみ可能だからある。この「自由の二重否定」が「実践的自由」であり、利己的な自由を抑えて大義に随っていくという「道徳の世界」が成立する。

・ただし、理想と主体が働きかける現実には距離があり、「非連続的な連続」の関係を成す。その非連続性を克服していくことは主体に負わされた使命であり、同時に理想は主体に対して「内在的即超越的」なものとして存在する。

・そのため、ここで言う自覚とは、「我が」、「我を見る」という契機に加えて、場所としての「我において」（見る）という契機に包まれて成立する

・「自覚と云ふことが自我の本性を成すと云ふとき、それは決して単なる観想的な自己認識として成立するのではなく、実践に即して自己を知ること、行為的に生命を造り現はすことに相即して自己を見ることに於て成立するのでなければならぬ」。

・しかし、エロスのな「理想主義的意志」に立つ限り、現実の人間はどうしても理想にはたどり着けない不完全な存在であることを引き受けなければならない。自覚することは、理想との乖離を常に確認することであり、その意味では実践は善への意志表現であればあるほど自己の限界に行き当たり、絶望する運命にある。そのため、主体を根柢から包み込み絶対的に承認し、肯定する原理としてアガペ（絶対愛）が求められる。そして、エロスとアガペは同一の構造の中に存在しなくてはならず、そうして成立する原理が「表現愛」である。

木村素衛〔述〕『国民学校の基礎問題』（1941,諏訪郡永明国民学校購読会）／木村素衛『形成的自覚』（1941,弘文堂）

・「公に表現しなければ私が私を知ることが出来ないという事は、私が始めから単なる個人でなくして本来社会的存在である事を意味する」のであり、自らが個性的存在であるためには「公共の世界を媒介」として他の個性的存在との「互いの生命伝達」によらなければならない。

木村素衛「哲学すること」河合榮治郎編『学生と哲学』（1941、日本評論社）

・哲学とは「常にその本性に従って自己形成の形を見つつ作る」自覚的存在を形成するものであり、さらに「反省的自覚を与え、それに従って生命の発展を知性の静けさと落ちつきとをもった確信ある行進へと導くもの」

▼国民教育論の展開

『国民と教養』（1939,弘文堂）の出版（フィヒテの教育論が題材）

河合榮治郎編『学生叢書』（1936-41,日本評論社）への寄稿（四編の論文）／ファシズム批判の論陣へ／昭和教養主義の代表的人物の一人として^{*1}。

*1 その後に河合が執筆した『学生に与ふ』（1940、日本評論社）には、木村からの強い影響があったという指摘もある（渡辺かず子「河合榮治郎と学生叢書」河合榮治郎研究会『教養の思想』（2002、社会思想社）184-85）。

『国民と教養』（1939,弘文堂）

・「国家は全く大問題に今遭遇してゐる。精神文化の方面に於て深く考ふべき問題が夥しく存在してゐる。性急な一面的な考へ方は、深くして重大な問題を解くことはできない。問題の重大さと深さとは、それに対する態度の慎重さ、考察の周到さ、洞察の深さを当然要求する。」

・そのために、知性と実践と完全な綜合を意味する教養が求められており、その目標は「全人間性の完全なる実現」にある。その実現を可能にするための多様な努力が、普遍的な価値の特殊なされ方として成立するのであり、「個人の自由にに基づく個性の教養的完成が初めて人類文化の発展を可能ならしめる」

・つまり、人類普遍の理念を追求する「人類文化の立場」においては、個人は「人類文化的価値の実現者」であり、直ちに人類の一員となる。

・しかしながら、個人は家族の一員であり、特定の種々の社会の一員でもあり、常に「特殊な全体」に属してその成員としても存在する。「特殊な全体」の内、極めて重要で独特な意味をもつものとして国家が存在し、そこで個人は国民として存在する。

・さらに、国家は「人類内部において区切られた単なる部分」ではなく、「一つの独特な統一原理があり、国民文化の根底には国民精神があつて、単なる人類の普遍化とは反対の方向に個性的統一を求めて行く」

・個人が人類の一員であり、同時に国民であるということは、直ちには連続せず、むしろ互いに否定し合う関係にある。常に国民性が現れているゆえに、「人間教養が全人間性の開発と完成を意味すると云はれるとき、単なる人類文化的教養の理念を以てこの全を云う」ことは具体を欠いた抽象となってしまう。ここで、両者相互の「否定的媒介」において矛盾的対立を止揚していく原理が必要となる。

・さらに、他とは異なる個性的な国民や国民文化が成立するには、他の個性的存在である他国の存在が不可欠である。つまり個性的な存在は単独では成立し得ないため、必然的に「自国の文化の世界史的媒介性を高めること」が伴うことが求められ、「国民的教養はこの面に於ては教養の世界史的拡大へと努力する」ものでなければならない。

※「世界史」と表現されるのは、無限に交渉（かかはり）が繰り返されていく国民間、あるいは国家間の働きのことであり、静的ではなく動的に働く媒介原理のことである。

・フィヒテ「ドイツの祖国愛を失わしめたのは利己主義である」／「宗教と道徳との欠乏」道徳的頹廢の結果としての「利己心を超克し、祖国愛に目醒めた真実の実践的人格を造ること」が教育の役割である。

II. 戦時中の糸賀の「実践」と思想

▼糸賀の生い立ちとキリスト教との出会い

1914（大正 3）年、鳥取県鳥取市生まれ。父との別居。母の実家のある米子で幼少期を過ごす。／鳥取県立第二中学校時代：圓山文雄との出会い。鳥取教会、英語夜学校、ミス・コーが主催したハウスパーティーにも参加。／医師になることを目指して松江高等学校に入学、病気のため休学。／宗教哲学への転向、京都帝国大学文学部哲学科への進学／圓山の急逝

糸賀一雄「圓さんを偲ぶ」今井新太郎『圓山文雄』（1937,北陸之教壇社）

・「遊び過ぎて病気をしたり、散々な失敗の憂目を見たりして一年二年と悶えながら、放浪の時を過したり、「独力奮起しよう」と悲愴な決心と誓いを立てた」時におり悪く結核に罹り、「天はどこまで自分をくるしめるのか、悲憤と焦燥に身もだえしながら、病床に身を横たへ」ざるを得ない中、その気持ちを伝えた圓山の「たゞ、祈っている」という答えと、圓山から送られた聖書の言葉に救われた。

・「残された自分は深い責任を覚えて居ります。彼の急逝が、漠としてゐた自分の心の無知をむち打つて、生涯の研究テーマを確立せしめました」。

▼キリスト者としての自覚と国家

1938年、代用教員、池田太郎、木村素衛との親交（国家総動員法成立の年）

糸賀一雄「国家と教会の現実」『開拓者』第34巻第4号（1939,日本基督教青年会同盟）。

・キリスト者であることは「それ自身本質的に二重の性格をもって国家に生き、教会に生きている」ことであり、「吾々にとつての問題は、常に吾々の生活、実践であつて、如何に生きるかの具体的な姿の中に、換言すれば吾々の生の動きの中に、解決を創造すること」にある。

・キリスト者の姿勢は、「現実を静止せしめ」、自己を疎外し「教会と文化、国家を切り離して対象的に考へる」といった「近代主義的な世界観の統一」によって導き出されるものではなく、「教会、文化、国家の問題は常に自己との聯関の下に、具体的に問はれ、具体的に答へられるものでなければならない。

・基督者が必然的にもたされる「国家と運命を共にしつゝ而も信仰に生きている」という「二重の性格」は、「国家が国家としての主権を吾々の上に強力に振ひはじめる時に、（略）最も明瞭に暴露され」、その状況において教会に自覚的に踏みとどまるという時、「吾々は基督者としての義務を自覚する」のであり、矛盾の存在として如何に行爲するかということが問われている。なぜなら、教会は「主キリストの身体でありながら人間の交わり、更に文化・国家の中に存する仕方ではか存することができない」ため、「教会の神学は常に時代の問題に関わり、歴史の現実を問題として、それとの聯関の下にしか果たされ」ず、歴史文化の具体である「国家の現実を捨象してしまうことは不可能」である。

・パウロが「ユダヤ人にはユダヤ人の如く、ギリシャ人にはギリシャ人の如く」と発した言葉の中に「彼の時代に於ける立体的な生動性を把握すべき」

・「吾々の主体的な実践、文化の現実に突入する信仰の現実を、吾々の各々の立場に於いて生きつゝ、またかくの如き教会を祖国に新しく創造しつゝ、強靱な自覚的な戦いの生活を有りたいのである」。

▼初等教育の教員としての「自覚」と「確信」

糸賀一雄「『確信』について考へたこと」『京都市教育』第16巻6号（1939,京都市教育会）

・「各自が自己の天職使命を自覚して、国家百年の大計に参与せよといふことにある。従つて、教育者が教育の使命を自覚することは直ちに、国家に対する積極的、建設的な意義を有つこととなるのである。教育使命の自覚は教育実践に於ける確信に相通ずる。」

・「教授上の細目が恐ろしく親切に規定されてゐること」、「どの様に規定されてゐるとしても、否規定されてゐればある程、甚だ逆説的ではあるが、その型を破らねば教育が生きて来ないのである。

・然るに他面、時代の烈しい世界的相剋は、吾々を駆り立てゝ国家的な民族的な自覚に高め、教育実践上の態度も勢ひ此の全体的な部面に集中されて来た傾向を見のがしてはならない。（略）最近日本主義を標榜する教育界の著作が激増してゐるのを見る。かうした指導原理の確立は教育者にとつて誠に喜ばしいことゝ謂はねばならないが、然したゞ一つ茲に気懸かりであり、同時に不満でもあるのは、かうした原理がやはり吾々にとつて規定されたものとしての意識しか持たないでしまひ易いといふことである。原理が確立される際に一番恐ろしいのはこの規定性である。其所に何時教師自身の主体的な、知性的であると同時に意力的な関与がなく、原理に対する安易な盲目的な追従だけが生じ易いのである。

・「往々にして偏狭を排他的思想を以て日本精神に純なるものと考へるのは、全く批判的科学的精神の欠如に依るものと謂はねばならない。（略）此の点に関して吾々は大いに、所謂日本主義に批判的であつてよいのではなからうか。考古学的な実証によつて始めて基礎づけられたと考へる如き日本主義が若ありとすれば、さうした日本主義を振りかざすことは、国家の現在の任務遂行に当たつて実に躓きの石

たるを免れない。(略) 功利主義御都合主義を廃して絶対的なるものに帰れるときに確信が生ずる。」

・「吾々は少なくとも現在の自己の立場に確信と誇を持ち度い。(略) これは決して理想の放棄を意味したり、現状への安易な満足を意味したりするものではなく、彌々熱烈な向上の希望に燃えしめるものである。」

▼「キリスト教役人」として

1939年5月、鳥取第四十連隊入隊、3ヶ月後に発病して除隊／滋賀県庁に移り、戦時下の地方行政に携わる(総務部総動員課、学務部社会教育課兼務：各地域を巡回しながら国家の方針を伝達する)。

糸賀一雄「ある精動指導者の手記」『開拓者』第35巻第5号(1940,日本基督教青年会同盟)

・「学校の先生という好きな職場が待っていてみたのにそれを捨て、大嫌ひの官吏になった、というよりならねばならなかったことに対して、私は不思議な摂理を感じてゐる。勿論私が決心したことである。しかしそのやうにしか決心出来なくなつたところに私は時代の波を感じ更にその背後に神の召を聴いたのである。(略) 眼は外に向き勝ちである、しかし内側に向けなければならない。」

・「物心一如の『物』が、精動運動に依つて真に取り扱はれたのではなく、たゞそれに就いて語られたにすぎなかったといふ面もあったからである。」

・「今日の農民は単に自己のために働くといふ狭い殻を破つている。殊に農村の青年はさうだ。事変に依るその国家的な自覚が最も熾烈に燃えているのが農村であると思はれる。彼等は伝統的な太々しさねばり強さを以て、黙々と鋤をふり上げ、単純に国を熱愛してゐるのである。私は茲に日本の強さを再発見した。(略) せめても横柄な横柄づくな役人にならないことを以て、そして農民の真の声を聴きうる役人になることを以て、そして彼等の感謝することの出来る役人になることを以て基督に仕へる心をあらはしたいと思ふ。」

・「宗教的な心構えの萎えること程怖ろしいものはない。(略) 宗教が生命的に躍動するときに難局が内側から切り拓かれて行くといふのである。(略) 私は農村に語るに徒らに『東亜の新秩序』を口にしたくない。そのためには、我々としては自分の国の中に、郷土の中に、そして家の中にもう一つ突込んで自分自身の中に、精神的な新秩序を建設せねばならぬと信じてゐるからである。」

▼下村湖人との親交、「煙仲間」運動への参画

糸賀一雄「下村湖人著『青少年のために』を読んで」『滋賀教育』第568号(1943,滋賀教育会)

・「世を挙げて作られた世界に安住してゐるだけではなるまい。何も彼も規定される世界であつても、その世界自体を作り之に方向を与へて行く者として、主体的にこの世界に住むのでなければならないと思ふ。」

<戦後までの空白>

III. 糸賀の福祉実践における教養の意味

▼「日本再建の責務」と木村の逝去

木村素衛「一、戦後の教育について」『恩師への追想』(1948,信濃教育会出版部)

・「これからは嘘を言わなくて通る世界が開けてくることを感じた。戦争中はおびただしい虚偽が横行

していた。私が戦時中言つて来たことは、今日の新しい国民教育においても、何等変りはない。従つて、二枚舌を使わなくてもよく、その点幸いである。」

敗戦の要因は、

第一に国力の過大評価、つまり独善的な優越感があったことである。国力は、文化力や思想の貧困とも関連する。個人主義を利己主義と取り違えて道徳的頹廢、利己主義がはびこっていたことが、自国と他国の国力の正当な認識を阻害した。

第二には、日本精神の本質とその発展の仕方の問題である。日本的なものを太らせるためには、外国文化の受け入れる必要があるのに、それをせず日本精神を食い物するだけで、それを太らせることをしなかった。

利己主義的に頹廢した国民道徳を再建することが、日本の再建にあたる教育関係者の責務であり、「自分自分に相応した教養をつけて行くべきである」

・「国家観念といつても、抽象的にでなく、農村児童としての正しい自由主義を伸張して、国家に結びつくように導かねばならぬ。画一主義を廢して真の自由主義にのつとつて行かねばならぬ。(略)人生は常に荒波の待つてゐるものである。これを正しく乗り越えていくのが真の自由である。真の人間性を実現するのが自由である。それには困苦欠乏に耐え得る努力的なものを養うことが必要である。(略)強い自立的意志を鍛錬しないと真の自由というものは生まれて来ない。日本の自由は強い意志を鍛錬してデモクラチックに行かねばならない。」

▼木村の急逝（1946年2月）／糸賀の病気再発、休職・療養（1946年1月～）／近江学園長就任

糸賀一雄「一年を回顧して」『南郷』第六号（1948,近江学園）

・「現実を回避しないでいつも根源的なものに遡及しながら理想をめざして努力する」

▼近江学園の創設と発展の中で

1948年12月、「近江学園事件」

糸賀一雄「(続)山伏の夢」『南郷』第九号（1949,近江学園）

・「内部自体にも打破することの困難な壁を自覚せざるを得なかった。(略)建設の苦勞と戦う我々を、世人は、愛の聖者の如く賞賛し、次々とできあがって行くその事業を絶賛しつつ、その半面その賞賛に自惚れている者への批判と評価を忘れないものである。ひとたび自己自身の力を過信したものは、自己自身の真実の姿を凝視することをおそれ、いつも可能性の世界に逃避して、そこを真実の世界と誤信する。

(略) 荊の途はむしろ耐え易い。人の心の中に巢喰う影と戦うことは難い。」

糸賀一雄「精神薄弱児の職業教育—学園の五年間の記録と反省」『近江学園年報 第四号』（1952,近江学園）

・「実は、方法論が問題であったと同時に、その底を流れるもの、言いかえれば、職員として、教官として、自分自身というもののぎりぎりの「自覚」が問はれているということにみなが気づいた。(略)この社会がどういう成り立ちであつて、それをどうもつて行くべきかという自分自身の使命をも含めて、主体的に社会を考え て行くというのが「自覚」の名に値すると思うのである。この自覚は社会の保守的な現状維持の本能のようなものに対する妥協のみではなくて、全体的に向上、進歩しようとするもう一つの本能のような熱願を知つて、その責任をも担をうとする態度を生み出して来るものでなければならない。リアリズムであると共にイデアリズムでもあるような、ものであるかも知れない。そういう主

体的な態度を含んでいるのである。いつでも社会は、そういう自覚者によつて支えられもし、進歩もしているものである。そして自覚したもののみが責任者である。」

▼世界平和に対する「自覚」と生命の全体性

朝鮮戦争の勃発、東西の対立の深刻化、「歴史を成す者」としての自覚

糸賀一雄「信仰とその働きを通じて平和へ（堅田教会におけるレーメンス・サンデー講壇の原稿）」（1950）
・「私は近江学園という私の働き場を通して、世界の悩みを感じます。（略）多くの人々が絶望したり此の日常性の中に転落して、反省も決意も、祈りもない生活に陥っている時に、世界の悲劇は益々その深刻の度を深めつつあるのではないのでしょうか」「世界といい国家といえ、巨大なマンモスのような、どうすることもできないものを私達に感じさせるのでありますけれど、今静かにその実体を洞察しますときに、結局は、その国を、また世界を構成している私達と同じ『人間』の問題に帰するのであります。（略）自由と平等の離反に悩む世界は、その悩みを自己の悩みとしている自覚者によってしか救われないうであります。」

糸賀一雄「東洋への郷愁（下）」『滋賀新聞』昭和二七年四月三〇日

・「もしわれわれが、その純粹さと素朴さの故に、永遠にして絶対な「真理」と「平和」の原理を直覚して、それを生きることが出来るならば、虚偽と闘争の中に疲れ切っている世界の大人たちは、来つてわれわれからその原理を汲み取ろうと願うことだろう。（略）それは決して過去の自己中心的な、排他的な考え方でもなければ、狂気じみた妄想でもない。分裂と闘争の悲劇的な歴史を通じて、人々は、愛による一つの世界、真理と平和と自由と正義の世界を求めつづけている。（略）日本の世界的な生き方をもう一度改めて深く考えてみたい。」

糸賀一雄「馬鹿談義」『滋賀新聞』昭和二七年六月一四日。

・「もともと分析されない全体としての人間」に対する認識

▼福祉実践における「行動的・実践的理論」

昭和二〇年代後半～：社会事業施設・教育関係団体の活動が活発化

糸賀一雄「平和運動と生活」『清流』第九号（1954,滋賀県瀬田高等学校定時制校報）

・「だれしも平和を願うことについては異論がないはずで、この点では世界中が一つであるべきだということである。それなのにその実現のための方法や立場が対立的であったり、排他的であったり、闘争的であるということはその願っている平和の理念と根本的に矛盾することである。（略）相手を斥け、たたきつけ、暴力的に押さえつけて平和を実現するのだというような考え方や、やり方は反省されなければなるまい。むしろ話し合いのできる共通の地盤の発見が大切だと思う。（略）国ぐにの政治も文化もそれぞれ異なっている今日、平和な政治体制や経済のあり方はこうでなければならないという、画一的な統制的なものが要求されるべきかどうかということに私は疑問をもっている。むしろそれぞれ異なった政治、経済、文化の底に共通なものとして、人間の生命が尊重される立場というものがあるはずだと思う。」

糸賀一雄「展示会の反省」（1954,未発表原稿）（『糸賀一雄著作集Ⅱ』322頁）

・「学園の考えは正しいという自負だけでなく、他の施設のやり方の生ぬるさや、（略）当局の無為無策に対する非難も潜在していた。要するに積極的な態度をもてばもつほど、それは攻撃的であり、排他的

であり、独善的であったことは否定できない。」

IV. 木村素衛の「表現的生命」と糸賀の「重症児の生産性」、「共感の世界」

▼「社会変革」の主体としての重症心身障害児と「重症児の生産性」概念

糸賀一雄『福祉の思想』（1968,日本放送出版協会）

- ・「重いものには保護をといっても、私たちは保護という名の飼い殺しを願っているわけではありません。（略）重い障害をもっている人たちを中心にしたコロニーが必要だからといっても、そのコロニーが世間から隔離されたもので、そこに生涯を安のんに暮らせれば本人も幸福であろうし、健全な社会にとっても損害が少なくすむといった考え方でコロニーがつけられるとすれば、それはもう一度根本から考えなおしてみる必要があると思うのです。」
- ・「この子らが不幸なものとして世の片隅、山峡の谷間に日の目も見ずに放置されてきたことを訴えるばかりではいけない。この子らはどんなに重い障害をもっている、かけがえのない生命をもっていて、かけがえのない個性的な自己実現をしているものです。人間とうまれて人間となっていくのです。その自己実現こそが創造であり、生産であるのです。私たちのねがいは、重症な障害をもったこの子たちも立派な生産者であるということを認めあえる社会をつくろうということです。（略）しかもこの子たちが自己実現という生産活動をしているというのは、じつは二重の意味をもっているのです。重症の心身障害という限界状態におかれているこの子らの努力の姿をみて、かつて私たちの社会功利主義的な考え方が反省させられたように、心身障害をもつすべてのひとたちの生産的生活がそこにあるということによって、社会が開眼され、思想の変革までが生産されようとしているということです。」

▼木村素衛「表現的生命」→糸賀「重症心身障害児の生産性」

木村素衛『表現愛』（1939,岩波書店）2-3頁参照

糸賀一雄「この子らを世の光に」『両親の集い』第127号、第128号（1966、全国重症心身障害児(者)を守る会）

- ・「生命はすべて表現的生命、自分自身を表現していくところの命なのです。いいかえすと自己実現が可能な命の姿をすべてが持っているわけで、これは重症であってもなくてもみんな一緒なのです。自己を実現するとか、自己を表現するとかいう表現的生命は、すなわち自分の外にあるものを自分の内なるものの表現の材料にするということでもあります。いつでも自分の外のもを、環境を、自分というものを表現し、自分というものを実現するための素材にしていくことです。しかし、ただ外なるもの、親や、兄弟や、先生や、保母が単なる外のものとして、自己実現の素材であるだけかといえばそうではありません。素材であるように見える一面があると同時に、外なる親や、兄弟や、先生や、その重症心身障害児をめぐる人びとは、歴史的、社会的な外なるものとして、その子どもに抵抗を加えるわけなのです。この抵抗と内なるものが自分を実現しようとすることとの共なる戦いということ、共に生きていく姿というものが自己実現というものではないでしょうか。ここに障害者と周囲の環境との共同作業があるわけです。」
- ・「(略)重症の心身障害児たちは、実は生産社会に生産人として復帰することはできないでしょうが、人間と生まれて人間となるという自己実現をするということは、内と外との関係においてその人間の生産性を認めることに他ならないということです。芸術品につきましても、その作品は見ることににおいて生産されているのです。この重症な子どもたちを認める人びとが親であり、先生であり、社会であると

きに、この子どもたちは外からの環境から眺める姿の中に自己を表現していきます。自己実現を試みているこの生産性を私たちは否定することはできません。」

▼「共感の世界」

糸賀一雄『(糸賀一雄講演集) 愛と共感の教育』(1972, 柏樹社)

「(略) 人と生まれて人間となっていくというのは当たり前のことを言うんじゃないか。本来仏性であるから人間が成仏するんだというのと同じじゃないかと、(略) けれども人間が人と生まれて人間となる、それは本来社会的な存在であるといいますけど、その社会的存在となっていく道行きというものをわたしたちは問題にしなければならない。これを教育というのです。

人と生まれて人間となる。その人間というのは、人と人との間と書くんです。単なる人、個体ではありません。それは社会的存在であるということの意味している。関係的存在であるということの意味している。人間関係こそが人間の存在の根拠なんだということ、間柄を持っているということに人間の存在の理由があるんだということ、こういうことなんです。ですから、人間となるということは社会的な存在であることを証明してゆくことになるということなんです。生きるということは、社会的な存在としていきるといふことでなければならないんです。

そういう人と人との間柄というものが、共感の世界であることは申すまでもありませんね。自分だけのエゴイズム、自分さえ存在すればいいという考え方ではないはずですね。」

結びにかえて

・木村と糸賀は抗えない運命に直面し、苦しんだ経験から哲学に近接した。そして、個人の力では如何ともしがたい戦争も共に経験した。両者の関係によって培われた教養の思想は、自らが時代や状況に規定されているという自覚と、その中で如何にふるまうべきかという現実の考察をもたらした。その経験は、後の社会事業において「実践的考察」の基盤となっている。

・福祉実践者は、過去から未来へと連続する現在における「個的自覚点」である。その実践において課題を掘り下げ、普遍的な理念に向かって反省と行動が繰り返されていく。

・また、普遍的な理念が具体的な媒介なしに、直接に実現するわけではない。具体である地域社会や国家、そこに属する人々の意識やシステムの中にあつて、それらに自覚的に働きかけなければならない。

・そのため、正義や公正の具現化の方向で行動をするために必要な態度やふるまい、建前のためにどう行動したらよいかということについて常に反省されなければならない。ここに、糸賀の言う「自己との対決」や、福祉実践における自由の意味がある。

・ただし、「重症児の生産性」に見られるような理念としての高さに比して、収容施設に頼らない支援のあり方については未発であつて具体性を欠いており、現在の課題として残されている点にも目を向けなければならない。